

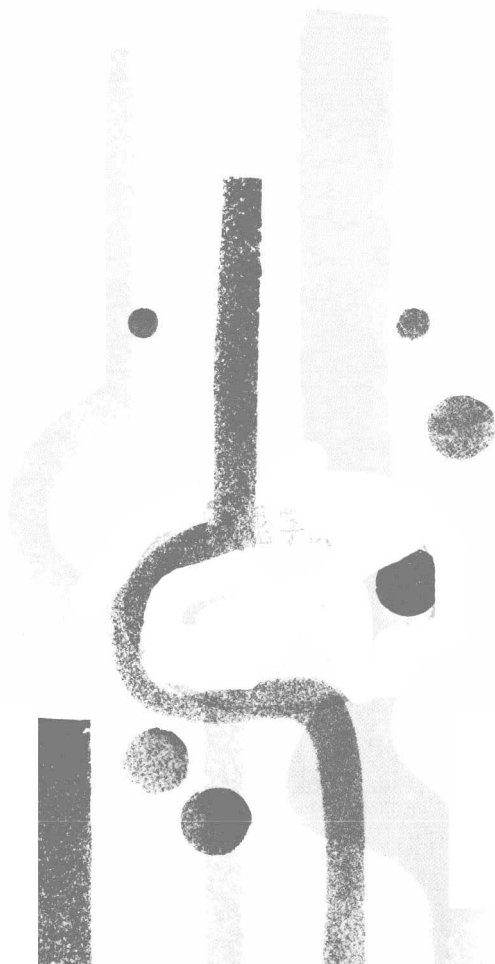
ヤング・ソルジャー

真木洋三

ヤング・ソルジャー

木洋三

日本経済新聞社



〈著 者〉

真木 洋三 (まき・ようぞう)

1926年、福岡県に生まる。九州大学経済学部卒業。

現在、ジャーナリストとして活躍中。

〔主要著書〕『爆殺の大統領空母』(祥伝社)、『小説 銀行管理』(日本経済新聞社)

『出向を命ず』(日本経済新聞社)、『横断人脈』(実業之日本社)、『仕手株天井を打つ』(徳間書店)

ヤング・ソルジャー

昭和五十五年五月十五日 一刷

著 者 真 木 洋 三

© Yōzō Maki 1980

発行者 黒 川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五
電話(三)二七〇三― 振替東京三―五五

印刷・東光整版／製本・大口製本
0093-9752-5825

目次

第一章 武士の情

5

第二章 老兵は甦る

65

第三章 無事故をめざして

139

第四章 八十歳は男盛り

191

装丁
上西康介

ヤング・ソルジャー

第一章 武士の情

1

国府津^{くうづ}から東京に出掛けるとき、石浜礼吉は、蝙蝠傘^{こうもりがさ}と重い鞆^{たもと}を手にしていた。適当に右と左に持ちかえ、リズミカルに振って歩けば運動になる。重い鞆は腕力の衰えを防ぐ。

白髪だらけで、誰が見ても七十歳前後の老齢なのがわかるし、いかつい顔にはいたるところ染^しみが浮き出て、皺も深い。しかし、白髪は、中折れ帽子をかぶれば隠せた。白のワイシャツで、襟元には蝶ネクタイをきりつと結ぶ。燕脂色の蝶タイが彼の好みだった。

鞆のなかには、経済書、戦記もの、株を売買するうえで参考になる有価証券報告書などがぎっしり入っていた。洋書もあった。アメリカの雑誌、英字新聞も車中で読むのである。もちろん、国府津と東京間の往復で三時間足らずを全部読書で過ごすわけではない。走り去る窓外の景色に眼を向けることもあるし、知人と車中で話し合ったりする。だから、鞆のなかのごく一部分しか読みこなせない。読む分量などはどうでもよかった。重いものを持ち歩くことこそ、老化を防ぐ健康法のひとつなのである。

老化を防ぐには、医学上の理屈に合った方法をなんでも試みるほか、精神を鍛え抜く必要もあった。彼が週に二、三日は兜町に顔を出すのも老化防止のためにほかならなかった。株で損をするよりも得をするに越したことはないが、彼は、損得の計算よりも、投機のタイミングを正確にとらえる修練の積み重ねこそ頭脳の若返り法だ、と思っていた。それに、兜町で彼より若い連中と話し込むのが愉しみなのである。

兜町では二流どころの角田証券が彼の取引先だった。常務の米倉定男と課長の船村俊郎が彼の係である。

昭和三十一年一月末の寒い日、午前十時過ぎ、オーバーを着込んだ石浜が店頭に現れた。中折れ帽子をとり、白のチョークで大きな黒板につき書き込まれて行く株価を見て、彼は、今日はいくらか堅調だな、と呟いた。このところ、相場は保合である。得意の空売りをする機会はないようだ。先高が見込める銘柄を地道に買い増しておこう、と思った。

石浜を見つけた船村が近寄って来て、

「米倉がお待ちしております」

階上の常務室を指さして言った。

石浜は、ひと通り株の動きを見終えると、階段の方へ歩き始めた。船村は重い鞆を持ってやろうか、と手を伸ばしかけて引っ込めた。鞆を持つのも運動のひとつと断られたことがあるからだ。車を石浜にすすめるのも禁物だった。たまたま蝙蝠傘を電車のなかに忘れ、雨が降り出したので、船村が車を用意しようとすると、蝙蝠傘をデパートまで行って買って来てくれ、と言いつ

した。雨が降ろうと雪が降ろうと、歩くと決めたのを変更するわけにはいかない。歩くのが老化を防ぐ一番のキメ手だ、と石浜は船村に言った。しかし、三十六歳の船村には、石浜の老化防止の並々ならぬ努力が、まだ身近に感じられなかった。

石浜は七十歳とは思えないしっかりした足取りで階段をのぼった。

常務室に入ると、米倉は、

「さ、どうぞ」

とデスクから威勢よく立って、簡単な応接セットの方へ石浜を案内した。米倉は、頭髮が薄くなりかけているが、五十二歳で、日露戦争の最中に生まれていた。しかも、わが海軍が、バルチック艦隊を破った五月二十七日生まれなのである。昔は、海軍記念日だった、と酒の席などで意気まくこともあった。

石浜は、鞆をソファの隅に置き、オーバーを脱ぎ、中折れ帽子を鞆の上に置き、蝙蝠傘を立てかけ、ソファに坐ると、

「キミィ、あの映画、見たかね？」

といきなり映画の話を始めた。米倉は石浜がすすめる映画が一〇本あるとすれば、そのうち二本ぐらいしか見れない。洋画、邦画を問わず、片っ端から映画を見る石浜にはとてもついて行けなかった。石浜にとって、映画を見るのも頭脳を若返らせるためであるが、米倉は忙しい身なので月に一本か二本がせいぜいだ。それも、石浜のしつこいほどの推奨があったものに限られていた。

『エデンの東』見ましたとも。確かに、名画でした」

「そうか。見てくれたか……ジェームス・ディーン、うまかったろう？」

「実に見事でした。父親が兄を偏愛し、愛情に飢えた弟の反抗心が滲み出ていました。父親が金に困っているのを見かね、相場でひともうけて、金をプレゼントするシーンがありましたね。父親は、第一次世界大戦中なので、若者は戦場に行き、生命を賭しているのに、相場で金もうけする奴があるか、と金を受け取らない。ジェームス・ディーンは、父親にしがみつき、手にしていた金をばらばらと落とす……泣きながら去って行くときの哀しそうな表情が、いまでも、頭にこびりついて離れません」

「青春期の反抗心が見事に表現されていたな。わたしの青春と少し違うけれど……」

石浜は、自分の少年時代を思い出した。彼は、静岡の網元の家に生まれた。かつて船二隻、網船二隻、漁師約一〇〇人を使っていたが、父親は政治好きで、山気もあり、ほかの事業に手を出して失敗した。経済的な苦勞が絶えなかった。父親への反抗心がなかったといえば嘘になるだろう。しかし、母親の愛が反抗心などを吸収し、暖かい家族愛のなかで育てられた。兄もいた。『エデンの東』では、父親が兄を偏愛するのだが、石浜の場合、兄には頭が上がりなかった。小学校に入る前、海でおぼれ、危うく一命を落とすところを兄に助けられたのである。その後も兄弟仲は良く、家計が苦しくなると、兄は銀行に就職し、石浜は進学したが、学費の足しにと金銭的な援助もしてくれた。

沼津出身で、父親の知人でもあった麻布中学の江原素六校長を頼って上京し、江原宅に下宿し

たのが、石浜の人格形成のうえで大きな転機となった。江原はクリスチャンで、同時に孔子、孟子にも詳しく、バイブルの講義も論語ふうにする一風変わった教育者だった。

石浜は、江原の家に一年半ばかり下宿し、通学している間に、学問の面白さを知ると同時に、宗教心を根強く植えつけられた。バイブルは英語で読んだ。教会に通って説教も聞いた。しかし、中学生のころは、キリスト教がよくわからなかった。学業の方は、英語と数学の成績が抜群で、一番で卒業した。

東京高商、いまの一橋大学に進学してからは、竜崎殿坂教会で、新島襄の弟子の海老名弾正牧師の説教をよく聞いた。中学生のころとは違い、少しキリスト教がわかりかけてきた。東京高商時代はボートの選手で、身体を鍛えるのに熱中した。つまり、彼の青少年時代は健全そのものといえた。

石浜の青少年時代とは違ってはいるが、『エデンの東』が肉親愛をテーマにしているのには身近なものを感じた。キリストの愛を違った側面から追求しているように思えたからである。米倉は、その点をどれだけ感じとめたのだろうか、と思ったが、理屈っぽくなりそうなので、音楽に話題を移した。

「あのテーマ音楽はね、レナード・ローゼンマンの作曲だ。ジェームス・ディーンの友人なんだ。古いヘブライの旋律とベルリオーズの宗教曲から、ヒントを得たのだそうだ」

「ずいぶん、お詳しいですね」

斜め前の椅子に坐り、石浜と米倉の話聞いていた船村が感嘆の声をあげた。彼もまた石浜の

すすめで『エデンの東』を見させられていた。しかし、ジェームス・ディーンの演技が素晴しかったと批評するほどの眼は持ちあわせていても作曲が誰なのかまでは知らなかった。船村にとつて、親と同じくらい年齢がかけ離れている石浜に、映画をすすめられるのも妙な具合だったが、このごろでは、石浜の癖をほとんど飲み込んでいた。映画に限らず、すべてに好奇心を働かせ、興味を抱くと、とことん食いついて行く。

船村は、孔子の教えにあるように「これを知るものは、これを好むものに如かず、これを好むものは、これを楽しむものに如かざるなり」と、石浜が言ったことがあるのを思い出した。株の売買の砂を噛む思いの毎日を過ごしているが、石浜が現れると、どこかに人生のオアシスがあると教えるような暖か味のある風がふわっとまき起こる。米倉も、船村と同じように、石浜に接するのを愉しみにしているようで、今日あたり、現れそうだ、との予感があると、すぐ自分の部屋へ連れてくるようにと船村に言い渡しておくのである。米倉は、これから老境に入ろうとしているだけに、老いを克服しようとして、ありとあらゆる手で立ち向かう石浜の細かい心遣いに興味を持つようになっていた。

石浜は、株の売買は老化防止に役立つし、おまけに資産をふやす一助になればこれに越した楽しみはない、といった気楽さで、兜町にやってくるのだから、映画の話、読んだ本の感想など、気分のおもむくまま、話し込む。

「ジェームス・ディーンは、残念なことに、昨年の九月三十日、二十四歳で亡くなったんだよ」「えっ、本当ですか？ あの主役が……」

米倉は驚いて、身を乗り出した。船村も、ジェームス・ディーンが死んだのを知らなかった。

自動車のスピードを出し過ぎて、事故死した記事は、わが国では社会面の片隅に小さく五、六行扱われただけであつた。『理由なき反抗』『ジャイアンツ』はまだ上映されていなかったし、爆発的なジェームス・ディーンのスームは訪れていなかったたのである。ただ、石浜だけは、アメリカの雑誌で、アメリカでブームになっているのを知っていた。

「若者たちのアイドルになるよ。いまに、すごいブームになる。この予測は間違いない。株の予測も、こんなにうまく行けばいいがね」

石浜は苦笑しながら、鞆のなかからアメリカの雑誌を取り出した。ジェームス・ディーンの記事を二人に見せたあと、雑誌を鞆に戻そうとして、こんどは、一冊の洋書を取り出した。『エデンの東』の原作者ジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』であつた。

「アメリカの農民のしたたかさがよく描いてある。百姓は、したたかでなくては生きて行けん。キミイ、外語出身だったろう？　なんなら、この本、貸してやろうか？」

「翻訳ものを読みましたから」

船村はしどろもどろで答えた。外語大学出身とはいえ、このごろは一頁の横文字すら読んでいない。株のセールスは朝早くから夜遅くまできりきり舞いの忙しさである。いまは洋書を読む悠長さなど、かけらもないのに、暢気な爺さんだな、と怨めしい眼で石浜を睨み返した。

石浜は、節くれ立った大きな手で『怒りの葡萄』を鞆にしまい込んで言った。

「百姓を十何年、やってみて、ものをつくる愉しみがよくわかった。もっとも、このごろ、年齢

で、野良仕事ができない。頭だけでやるブレン・ファーマーだね」

彼は、昭和十六年、東京・青山にあった本宅を売って、国府津の別荘に移った。五年間ほど青山に住み、青山墓地を散歩するたびに、立派な墓も、時の流れとともに風化し、最後は無縁墓となるのを見た。墓地に埋葬されるのは商人とかサラリーマンの成功者が多いが、そうした人たちに限って、後継者は住居が転々と変わり、暮らし向きも荒んで、先祖の墓のお守りすらでなくなる。ところが、農業は大地に根をはやし、先祖伝来の土地を守って行く。

太平洋戦争前後の食糧難もあって、彼は一町歩あまりの山林のほか、五反ほどの果樹園、一反の野菜畑をつくった。果樹園は、温州、夏柑、だいたい、レモン、きんかんなどの蜜柑類をはじめ、桃あり、柿あり、枇杷ありである。いちじく、桜桃も植えた。

果樹園だけでは物足りなくて、三反ほど田圃も買い、米もつくった。

彼には、実子がない。銀行員だった兄に先立たれ、その息子の一人音三を養子にした。いまでは養女の佳代子との間に二人の娘があり、孫娘を人一倍かわいがっている。農業は音三が主になってやり、忙しいときは近所の人に手伝ってもらっていた。アメリカから果樹栽培の本を取り寄せたり、農業試験場に行って、新しい品種を研究する頭の百姓、つまりブレン・ファーマーをもって彼は自認していた。

米倉は、石浜が、「百姓はしたたかでなければ生きて行けない」と言ったことから、昨年、石浜にすすめられて見た黒沢明監督の『七人の侍』の最後のシーンを思い出した。

「そう言えば『七人の侍』の百姓たちは、図太く生きてましたね。百姓が失業武士を雇い、土地

を守ろうとする。失業武士たちは苦心惨憺して野盜の群れと戦い、退散させたのはよかったが、四人の犠牲者を出し、生き残った三人は、土饅頭の上に刀を突き立てた犠牲者の墓の前で、百姓たちの田植の唄声を聞きますね。武士の一人が、勝ったのはあの百姓たちだと言う。風がびゅうと吹いて、侍は、風のように大地の上を通り過ぎるだけで、土は何時までも生き残る、百姓たちも土と一緒に生きる、と言いましたね。田植の風景と、置いてけぼりを食った三人の武士の切なさそうな表情が見事に浮き出てました」

「キミイ、なかなか、しっかり見てるね」

と、石浜は米倉を褒めたあと、

「武士はいまで言えば、サラリーマンだろう。自分の会社が昔の藩みたいなもので、会社のために忠節を励み、営々として働く。しかし、会社を辞めたり、定年で素浪人になってみると、宮仕えの身がいかに形式や建て前にふりまわされ、百姓が土に生きると違って、風のように通り過ぎただけだったかがわかる。ブレーン・フアーマーとは言え、土に親しんでみて、ようやく生き甲斐とは何であつたか、わかるような気がしてきた。武士の世界、つまりサラリーマン生活を客観的に見れるようになっただけでもありがたい、と思ってる」

「映画を見て、身につまされることが多いですね」

船村は、そう言つて自分の過去を振り返つた。彼は、太平洋戦争中、学徒動員で南方方面を転戦した。終戦のとき陸軍中尉だった。

いまは証券会社の課長で、株の売買手数料収入を伸ばすのに粉骨砕身している。サラリーマン

生活は結局は『七人の侍』の雇われ武士のようなもので、定年になったり、会社をクビになったりすれば、風のように通り過ぎただけというのはわかるような気がする。

米倉の場合、一応常務取締役で、サラリーマンとしては出世頭の方に入るであろう。しかし、役員にも任期があるし、社長にでもなれば別だが、六十歳で役員は定年との内規みたいなものがある。会社を離れたときのことなど、米倉はまだ考えてはいなかった。しかし、石浜の言い分には傾聴するに足るだけの内容がある。

石浜は、米倉と船村を等分に見て、

「活動写真の話ばかりしては、きみたち、商売にならん。貴重な時間を無駄使いさせてしまつて、すまん」

軽く頭を下げて言った。

「とんでもございません。いろいろ教えられるところが多いです。ごゆっくりなさってください」

米倉は石浜と話し込むのが掛け値無しで愉しいのである。映画に限らず、意表をつくような話の展開ぶりに引きずられていくうちに、知識もふえる。いわば、耳学問とでも言うのだろう。

「駄弁を弄した償いに、東西レーヨンを五〇〇〇株、買い増しておこう。二三〇円台だったね。

東西レーヨンは……」

船村はやっと本業の方に戻れて緊張した面持ちで、

「成り行きでいいでしょうか？」